広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	蕭統「文選序」の文章について
Author(s)	福井，佳夫
Citation	中國中世文學研究 , 53 : 36 - 62
Issue Date	2008-03-28
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051400
Right	
Relation	

蕭統「文選序」の文章について

福井佳夫

蕭統（五〇一～五三一）、あざなは徳施は、梁の武帝の長子である。後代では、おくり名の昭明と、太子のまま薨去した事情をふまえて、昭明太子と称されることがおおい。その蕭統が名篇を精選してあんだとされる『文選』は、現存する最古の詩文選集として名だかい。『文選』は後世、科挙の必読書となったこともあって爆発的な人気をよび、たかい権威をまねきよせた。かくしてその盛名は、編者の名ともども唐土のみならず、朝鮮半島や日本にまでおよぶにいたったのである。

そうした盛名のため、『文選』の表看板というべき「文選序」も、文学史のなかでは著名な作となっている。なかでも、序文中の「事出於沈思、義帰乎翰藻」二句は、『文選』の選録基準を明言したものとして、文学批評の世界ではつとに喧伝されてきた。そのためか、近現代の研究史においては、「文選序」はもっぱら文学批評の資料とみなされ、一篇の文学作品としてよまれることは、あまりおおくなかったようである。

だが、拙稿「蕭統文選序札記」（以下、前稿と称する。「中京大学文学部紀要」第四二―二号　二〇〇八）で考察したように、この「文選序」は、一篇の文学作品としてみても、充実した内実を有している。そこで前稿の考察をふまえつつ、当時の同種の作と比較しながら、「文選序」の文章について、その特徴や価値を浮きぼりにしてみたいとおもう。

くわえて、昨今この序文に対して、蕭統がじっさいに筆をとったものではなく、側近だった劉孝綽による代作だったのではないか、という疑念も提起されている。そこで、「文選序」の特徴をふまえながら、この序文の作者はだれかという問題に対しても、いささかの私見をのべてみたい。

一　評価の混同

はじめに、じゅうらいの「文選序」評価をふりかえっておこう。旧時における「文選序」への評言として、もっとも有名なものは、宋の蘇軾のつぎのようなものだろう。

舟中読文選、恨其編次無法、去取失当。斉梁文章衰陋、而蕭統尤為卑弱。文選引斯可見矣。如李陵蘇武五言、皆偽而不能去。観淵明集、可喜者甚多、而独取数首。以知其余人忽遺者甚多矣。淵明閑情賦正所謂国風好色而不淫、正使不及周南、与屈宋所陳何異。而統乃譏之。此乃小児強作解事者。(『東坡志林』題文選)

舟中で『文選』をよんだが、編集ぶりがでたらめで、作品の取捨選択が当をえていないのが、気にくわなかった。斉梁のころは文学がおとろえたが、この蕭統がとりわけだめだった。彼の「文選序」をよむと、それがよくわかる。李陵と蘇武の五言詩などは偽作なのに、『文選』からはずしていないし、『陶淵明集』は佳作がたいへんおおいのだが、たった数首をとっているだけ。これによって、他の文人の作でも、採録もれがおおいことが推測できる。

陶淵明の「閑情賦」は、[『史記』屈原伝でいう]「国風の詩は好色めいたものがおおいが、度をこしていない」ということばに、よくあてはまる作だ。『詩経』の「周南」にはおよばぬものの、屈原や宋玉の文学とはなにもちがっておらぬ。それなのに、蕭統は[「陶淵明集序」のなかで]この作をそしっている。これはさしずめ、子どもが無理して文学を解釈しようとしたものだ。

この批判で注目したいのは、蘇軾の「文選序」への評価が、文章じたいへの検討でなく、『文選』本体との関連によって、くだされているということである。蘇軾は、「文選序」をよむと、蕭統のだめさかげんがよくわかるという。だが、蘇軾の批判たるや、じっさいは李陵・蘇武の五言詩を採録したこと、陶淵明の詩文採録がすくないことを攻撃するだけであり、けっきょく『文選』編纂(作品の作品選録)への不満を、ぶちまけているだけなのだ。真の意味での「文選序」批評ではない。また後半の「閑情賦」に関した批判では、「子どもが無理して」云々と、蕭統への侮蔑の情をかくそうとしない。だが、これも「文選序」とは関係がなく、「陶淵明集序」中の議論への批判なのである。

こうした批評のしかたが典型だが、蕭統「文選序」に言及するばあいは、『文選』の作品選録の可否や、彼の文学観への賛否にかかわったものがおおく、「文選序」それじたいの文学的完成度に言及するものは、はなはだすくない。蘇軾以外による「文選序」批評を、手ぢかにあった胡暁明『文選講読』(華東師範大学出版社　二〇〇六)百五十三〜四頁からひろってみよう。

○宋時学者不解文銓、妄加参駁、謂統拙陋識、去取違宜。……以此譙統暴瑕掩瑜、不原作述之旨。統不云乎、「若以立意為宗、不以能文為本者。今之所撰、

抑又略諸」。蓋能文固先于立意、而立意者未必専于為文。（田汝成「漢文選序」　賀復徴『文章弁体彙選』巻二九一所収）

宋代の文学者たちは蕭統の選録方針を解さず、みだりに批判をくわえ、「蕭統は才識がおとったので、『文選』の選録がよろしきをえなかった」と主張した。……こうした事例によって、長所を無視し欠点をあばき、蕭統の意図を理解しようとしなかった。だが、蕭統は「文選序」で、「[子類の書は] 思想をのべることを宗としていて、文飾をほどこすことを主眼にはおいていない。それゆえ今回の選録からは、除外することとした」といっているではないか。これはおそらく、蕭統は思想よりも文飾を優先したのだが、思想をのべた作が文飾を重視していなかったからだろう。

○『文選』者、辞章之圭臬、集部之准繩。而淆乱蕪穢、不可殫詰、則古人流別、作者意指、流覧諸集、孰是深窺而有得者乎。（章学誠『文史通義』詩教下）

『文選』は文学の規範であり、また集部の作の手本である。ところが、そのじつ [「文選序」の発言をみても]『文選』が混乱し蕪雑であることは、難詰しつくせないほどだ。すると、古人の流派や作者の趣意などは、おおくの選集をみわたしたとて、いったいどの序文が深意にまで達しているのだろうか。

○後世文人、有心于為文而其文益陋。如古人之為文、未嘗有心于為文、而自不能以不文。蕭統議老荘管孟四子之文、而謂其立意為之、則是有心于為矣。以文而待四子、且不可。況又謂之立意乎。其説陋矣。（魏天応編選、林子長箋解『論学繩尺』巻七）

後世の文人は意識的に文をつづろうとするから、その文はますますだめになった。古人が文をつくるや、意識しなくても、ひとりでに文になったのだ。蕭統が [「文選序」において]『老子』『荘子』や『管子』『孟子』の文を論ずるや、思想を表現したものという。すると『老荘』らは、意識的に文をつづったことになる。『老子』『荘子』らを [意識的な] 文とみなすことさえ誤解なのに、ましてや思想を表現したなどとは、どうしてあたっていようか。蕭統の見かたはまちがっている。

○専名為文、必沈思翰藻而後可也。（阮元「書梁昭明太子文選序後」）

ある作を文学だと称しようとすれば、かならず [「文選序」にいう] 沈思にして翰藻という基準に達してこそ、みとめることができよう。

これらの評言をみると、「文選序」への評価と『文選』への評価とが、ごっちゃになっていることがわかろう。「文選序」を評しているのか、『文選』編集方針を評しているのか、区別するのがむつかしい。「文選序」に言及するばあいでも、評言の矛先は、「文選序」一篇の字句表現

や文学的完成度ではなく、［序文中にあらわれた蕭統の］編纂方針や文学観の当否のほうへむかっている。つまり「文選序」への批評は、ややもすれば蕭統の文学観や作品選録の当否への議論にうつり、さらに蕭統や『文選』本体への褒貶へと、すりかわっていきやすかったのである。

こうした「文選序」批評のしかたは、近代にはいっても同様であった。とくに、清の阮元からはじまる「事出於沈思、義帰乎翰藻」二句への注目は、「文選序」の文章を『文選』選録基準、ひいては文学批評の資料とみなす、近現代の研究動向の嚆矢になったといってよい。最近あらわれた、王立群氏の手になる『現代文選学史』（中国社会科学出版社　二〇〇三）と『文選成書研究』（商務印書館　二〇〇五）の二書は、近代以降の『文選』研究史を俯瞰した便利な書物であり、本稿を草するにあたって、私もおおくをおしえられた。その「文選序」をあつかった項（前書一三九～一七一頁）をひもとくと、「文選序」が文学批評の資料とみなされ、一篇の文章作品として考究した研究は［注釈や翻訳はべつとして］ほとんどないことを、あらためてしったのであった。

こうした旧時の批評や近現代の研究動向は、『文選』の権威向上という事情を反映していよう。唐代以降、『文選』の権威がたかまるにつれ、後続する選集への影響力がおおきくなった。いきおい、後世の人びとの関心は、「文選序」それじたいの字句表現や文学的完成度よりも、［そこで表明された］蕭統の文学観や『文選』編纂方針への褒貶のほうへ、むかっていきやすかったのである。

二　対偶の特徴

だが、こうした評価のしかたは、もし蕭統がいきていたら、おそらく不本意だと感じたにちがいない。彼の『文選』には、序ジャンルの名篇も採録しているが、「文選序」をよんでみると、その序の名篇からまなんだとおぼしき表現が、あちこちに散見している。つまり蕭統は、たんなる解題用の文としてでなく、過去の序の名篇にまなびつつ、典故や対偶の技法も駆使しながら、一篇の文学作品として「文選序」をつづったようなのだ（くわしくは前稿を参照）。そうだとすれば、我われも文学批評の資料としてだけでなく、一篇の文学作品として検討してゆく必要があろう。では、そうした視点からみたとき、「文選序」はいかに評価されるだろうか。ここでは、形式的な方面から検討してみよう。

まず対偶からみていこう。対偶率、つまり一篇中の対偶の割合をしらべてみると、「文選序」の句数は全部で百八十五句、うち対偶を構成する句は百十四句であり、対偶率は六十二パーセントとなる。これだけでは、おおいのかすくないのか、よくわからないので、比較のために、同時期の序文ふう文章の対偶率もみてみよう。すると、

	対偶率%	句数	対偶を成す句
玉台新詠序	九〇	一六二	一四六
文選序	六二	一八五	一一四
文心雕龍序志篇	五二	一四二	七四
詩品（上）序	四一	二二二	九二
宋書謝霊運伝論	三八	一三七	五二

ということになる。この表をみてみると、「文選序」の対偶率は「玉台新詠序」についで、二番目にたかいことになる。意外なことに、美文による文学批評の雄、「文心雕龍」の序志篇よりも、対偶率がたかいのである。もちろん対偶の多寡だけで、作品の文学的価値がきまるわけではない。だがそうだとしても、駢儷文が流行した六朝期の文章である以上、対偶の多寡は、当該の作の文学的評価をかんがえる有力な指標になるといってよい。

では、「文選序」中の対偶を、詳細に検討してみよう。まず対偶の種類からみると、同内容をくりかえした正対のおおさが指摘できる。例をしめすと、

若夫┌姬公之籍、与┌日月俱懸、┌孝敬之准式、
　　└孔父之書、　└鬼神争奥、└人倫之師友。
豈可┌重以芟夷、
　　└加之翦截。

さて、周公の古籍や孔子の書物たるや、日月とならび完全で、鬼神と奥深さをあらそう存在であり、孝敬の範式となり、人倫の手本となすべきものである。されば、どうしてこれらの書に取捨の手をくわえたり、一部をきりとったりできようか。

が典型だろう。ここは、「経書は偉大な書物なので、取捨の手をくわえて採録することはできない」とのべた部分である。ここで対をなす句、たとえば「姬公之籍」と「孔父之書」とは、ともに儒教の経典をさしており、ほぼおなじ内容だといってよい。どうように、「日月俱懸」と「鬼神争奥」、「孝敬之准式」と「人倫之師友」、「重以芟夷」と「加之翦截」も、それぞれ相似した内容を有している。かく内容が相似するからには、対偶の片方を略しても、致命的な破綻は生じないだろう。じっさい、右の文の対偶下句をきりとってみると、

若夫姬公之籍、与日月俱懸、孝敬之准式。豈可重以芟夷。

周公の古籍たるや、日月とならび完全で、孝敬の範式となすべきものである。どうしてこれらの書に取

捨の手をくわえられようか。

となるが、これでも文意はほぼ通じよう。

現代的な感覚では、こうした正対の多用は無用の重複であり、蛇足にすぎぬとおもわれるかもしれない。だが、当時の文人たちの感覚では、そうではなかった。おそらく蕭統は、「姫公の籍」だけでは、いいたりぬ感じがしたのだろう。だから、内容が重複しても、対応させた「孔父の書」をつづけたのだ。どうように、「日月と倶に懸かる」とつづったなら、「鬼神と奥を争う」と対応させなければ、おちつかなかったのだろう。このように、いちどいえばわかるのに、それでもあえて類似した語句をくりかえして、ゆるゆると読者を説得し、納得させてゆくのが、当時の美文の叙しかただったである。

ただ、かく正対ばかり連続しては、その繰りかえしが鼻をつき、論旨がスムーズに進展してゆかない。そのため、文脈が停頓した印象をあたえ、まだるっこい行文だと感じさせてしまう。そうした弊を、蕭統たちも気づいていたろう。だから、「文選序」では文中に適宜、散体の句を挿入して内容の重畳をさけ、論理をスムーズに進行させようとしている。つまり駢体（対偶）と散体（非対偶）とを、適宜まぜあわせるわけだ。その例として、さきの「若夫姫公之籍」句の直前の部分を例示してみると、

余監撫余閑、居多暇日、
　┌歴観文囿、未嘗不心遊目想、移晷忘倦。
　└泛覧辞林、
自姫漢以来、眇焉悠邈、
　┌時更七代、┌詞人才子、則名溢於縹嚢。
　└数逾千祀。└飛文染翰、則巻盈乎緗帙。
自非┌略其蕪穢、蓋欲兼功、太半難矣。
　└集其清英、

私は監国撫軍のあいま、余暇がおおかったので、詩文の苑にわけいり、ことばの林にいりびたった。そして、心は文学の世界にあそび、目は詩文の内容をおもいうかべ、日がかたむいても、あきることがなかった。

周や漢よりこのかた、はるかに時がへだたり、王朝は七代もかわり、千年以上の歳月がすぎさった。その間にあらわれた詩人や才子は、その名が書物にあふれ、彼らがつくった名篇や佳什は、書帙のなかに充満している。蕪雑な作をとりのぞき、精鋭な作をあつめぬかぎりは、いくら努力しても、その大要に通じることはむつかしい。

となっている。ここでは、駢体（訳文の――部と……部とで対偶をなす）と散体とが適宜まぜあわさって、つづられているのがわかろう。こうした駢散の兼行が、対偶を多用した美文でも、なんとか論旨がとれるようになった一因だといってよい。[1]

ちなみに右の表では、徐陵の「玉台新詠序」の対偶率が異常にたかかった。そのことはこの序文が、駢散を兼行せず、文字どおりの駢体でつづられていることをしめす。そのためか、「玉台新詠序」の文章は論旨がはっきりせず、意味がとりにくくなっている。ふつう「玉台新詠序」の難解さは、典故の多用に起因するとされているが、駢体の過多にも一因をもとめるべきだろう（ただし、それは駢散兼行の叙法をしらなかったからではなく、徐陵が意図的にそうした文章にしたてたのだろう）。また内容的にも、編纂の由来や編者の説明などが韜晦めいた表現でかかれていて、一書の解題としての役わりをじゅうぶんはたしていない。すると、序文としての実質的内容を有した文章で、対偶率がもっともたかいのは、この「文選序」だといってよかろう。

さて、すこし話題がそれたが、「文選序」中の対偶の検討にかえろう。右でみたように序文中の対偶は正対がおおいが、その対応はよく考量されたものがおおい。たとえば、さきの「歴観文囿・泛覧辞林」や「時更七代・数逾千祀」は、ほぼ相同の内容を叙した対偶だが、それでも慎重に同字が重複するのをさけている。これは、当時の文章作法のひとつとして、「なるべく同字の重出をさけよう」という諒解があり（『文心雕龍』練字篇に「三に重出を権るべし」とある）、蕭統はそのルールをまもっているのだろう。ほかにも、

○ 式観元始
　 眇觀玄風

太古のころをみわたし、原始の風俗をふりかえってみると、

○ 踵其事而増華
　 変其本而加厲

つぎつぎと乗物をつくってゆくうちに、華麗さがましてき、また水のもとの性質がかわって、冷たさがましてきた。

○ 退傅有在鄒之作
　 降将著河梁之篇

引退した傅の韋孟は、「在鄒」（四言）をつくり、降将となった李陵は、「河梁」（五言）をつくった。

などもそうである。右の三聯、「而」や「之」など助字の類はしかたがないが、実字ではおなじ字の使用をさけている。とくに傍点を付した字などは、うっかりすると同字をつかいかねない箇所である。それをさけているのは、やはり意図したもので、蕭統のこまやかな配慮の結果だろう。

対偶中の同字忌避など、ちいさなことであり、問題にするほどのことではないと、おもわれるかもしれない。だが、こんなちいさなことが、才腕の良否を暗示することもあるのだ。たとえば、さきに比較の対象とした鍾嶸「詩品序」の文をみてみると、

○ 若専用比興、則患在意深、意深則辞蹟、
　若但用賦体、則患在意浮、意浮則文散。

比興の叙法だけをつかったならば、欠点として意味がとりにくくなり、意味がとりにくいと、文辞も破綻してきやすい。また賦の叙法だけをつかったならば、欠点として意味があさくなり、意味があさくなると、文辞も散漫になりやすい。

○若夫 春風春鳥、夏雲暑雨、
　秋月秋蝉、冬月祁寒、

春の風や春の鳥、あるいは秋の月や秋の蝉、また夏の雲や炎暑の雨、冬の月や寒気などは、

などの対偶がみつかる。はじめの対偶では、助字の類以外でも「若」「用」「患」「在」「意」（二回）「深」「浮」などが重複している。ここは比興と賦体とを対比的に叙した部分なので、多少の重複はやむをえないかもしれない。だがそれにしても、助字の「則」字の重複（二回）もいれると、わずか六句のうちで八字まで重複するというのは、無頓着すぎるとせねばならない。美文としては、異例な措辞だといえよう。またあとの対偶では、「春」「秋」「月」の字が重複している（興膳宏『文学論集　詩品』五十二～三頁の指摘による）。この部分、「春」「秋」は技巧としての重複であり、うっかりミスではないと弁護できるかもしれない。だが、この両字はそうだとしても、「月」の重複は弁解できない。くわえて、ここ以外の粗雑な措辞もあわせかんがえれば、こうした重複のおおさは、やはり作者鍾嶸の文章手腕がとわれても、しかたないところだろう。

じっさい、鍾嶸「詩品序」では、ほかにも粗雑な対偶がみえている。たとえば、

平原兄弟、鬱為文棟、
劉楨王粲、為其羽翼。

平原兄弟（曹丕と曹植）は、文壇の棟梁としてどっしりと君臨し、劉楨と王粲は、その補佐役として活躍した。

では、「鬱為文棟」「為其」の対応がずれている。この部分、鍾嶸は対偶を意図したのだろうが、つい字句の対応をおこたったのだろう。また、つぎの文章をみてみよう。

陳思為建安之傑、公幹仲宣為輔、
陸機為太康之英、安仁景陽為輔。
謝客為元嘉之雄、顔延年為輔、
斯皆五言之冠冕、
　文辞之命世也。

曹植は建安の傑物であり、劉楨と王粲はその補佐役であり、また陸機は太康の俊英であり、潘岳と張協はその補佐役である。また謝霊運は元嘉の英雄であ

り、顔延之はその補佐役である。彼らはみな五言詩の権威であり、文学の第一人者たちである。

ここの「陳思」云々と「陸機」云々は隔句対を構成しているが、「謝客」云々は孤立し、対応する句がないまま、ほうっておかれている。劉勰がこの行文をみたら、「事がらが孤立して、対応する句がなければ、夔が一本足でよろつくようなものだ」（若夫事或孤立、莫与相偶、是夔之一足、踉蹌而行也）と、批判したことだろう（麗辞篇）。ここは、「謝客」云々に対応する句をおぎなうか、ぜんぜんべつの句形にして、いかにも孤影悄然ふうにみえぬよう、文章をくふうすべきだったろう。鍾嶸は対偶にすることを、うっかりわすれたのだろうか。とすれば、これも鍾嶸のラフな対偶感覚を、反映したものとせねばならない。

さらに、

師鮑照、終不及日中市朝満
学謝朓、劣得黄鳥度青枝

鮑照を師としながら、けっきょく彼の「日中市朝満」の句にはおよびもつかず、謝朓にまなびながら、わずかに「黄鳥度青枝」程度の詩句をつくるだけだった。

にいたっては、対偶らしき行文をつづっておきながら、もっとも基礎的な字数さえそろっていない。美文としてはおそまつすぎる行文であり、テキストに問題があるかとうたがわれるほどだ。[12] その意味でこの部分こそ、鍾嶸の美文能力のひくさを、如実にしめしたものといえよう。こうした粗雑な行文をみてみると、鍾嶸はやはり批評家であって、実作家ではなかったことが、よく納得されてくる。このように、いっけん些細な同字重出の忌避という事がらも、一事が万事というべきで、その文人の文章能力を暗示しているのである。

三　比喩と語彙

さて、対偶ばかりに考察が集中したが、「文選序」のこれ以外の技法も検討してみよう。すると、比喩のたくみな利用が注目される。序文第二段のつぎの比喩表現をみてみよう。

譬陶匏異器、並為入耳之娯、作者之致、蓋云備矣。
黼黻不同、俱為悦目之玩。

これらの諸ジャンルは、たとえれば、塤（つちぶえ）と笙はちがう楽器だが、ともに耳にここちよく、また黼と黻とはことなった模様だが、ともに目をたのしませることに、なぞらえることができる。作者がかたらんとする趣旨は、こうして表現できるようになった。

この部分は、音楽と模様の比喩を、対偶中で利用して

いる。塤と笙という楽器、黼と黻という模様は、それぞれことなったものだが、ともにひとの耳目をたのしませる、という。ここでの発言は、現代の我われには、それほど意外なものではない。しかし文学史的にみると、これはきわめて注目すべき意見の表明なのだ。すなわち、ここの発言は、

要するに文学作品の目的は娯楽に在ることをいったと解してよい。この発言は頗る重大な発言であると考える。詩を始めとして種々の文学は、人を楽しませる目的を持っているもので、いってみれば文学は娯楽の用に供するものであるというのである。鑑戒的に考えがちな従来の文学観に比べると、重大な転換である。

という重要な意義をもっているからである（小尾郊一「昭明太子の文選序」〈『真実と虚構―六朝文学』所収　汲古書院　一九九四〉）。そうした重要な箇所で、こうした音楽と模様の比喩がつかわれているのだ。

もっとも、音楽や模様の比喩をつかって文学論をかたるのは、じつは前例がないわけではない。たとえば、西晋の陸機「文賦」では、

「暨音声之迭代、
若五色之相宣。

詩文の音声がたがいに変化するのは、あたかも五色がはえて刺繍の模様をなすかのようだ。

と詩文のリズムを刺繍の模様にたとえており（李善注による）、また梁の沈約「宋書謝霊運伝論」でも、

「五色相宣、由乎玄黄律呂、各適物宜。
八音協暢、

「詩文において」五色がたがいにはえ、八音がぴたりと調和するのは、色彩や音律がただしく配合されていることに起因するのである。

と色彩や音律の比擬をつかって、詩文における平仄の諧調を説明している。用語こそことなるものの、やはり文学論のなかで、音楽や模様の比喩を使用していることがわかろう（陸機の例は直喩であり、沈約の例は隠喩にかたむく）。「文選序」の比喩利用は、そうした流れの一環だったとかんがえてよい。

ただ、「文選序」中の比喩は、陸機や沈約のそれとちがって、文学創作に関する理論的内容を、平易にたとえたというだけではない。「文選序」の行文を慎重によんでゆくと、この比喩の部分は、「文学は諸ジャンルにわかれたここちよい　↓　諸ジャンルもこれとどうよう、ひとをよろこばす」という論理をとっていることがわかる。つ

まり、音楽と模様の比喩は、「文学の諸ジャンルは、ひとをよろこばす」という断案をくだすための、論拠として作用しているのだ。たんなる、わかりやすいたとえや、文章のあやとして、つかわれているのではなく、論理の一環として使用されているのである。

「文選序」にはもうひとつ、やはり同種の目的で利用された比喩表現がある。それは、

若夫［椎輪為大輅之始、大輅寧有椎輪之質、
　増氷為積水所成、積水曾微増氷之凛、］
何哉。

そもそも、［そまつな乗物の］椎輪は、［玉でかざった華麗な乗物の］大輅の先祖であるが、後代の大輅には、椎輪の質朴さはもはや残存していない。氷は、水があつま［り、こお］ってできたものだが、もととなった水には、氷の冷たさなぞはなかった。それはどうしてだろうか。

の部分である。ここの対偶では、乗物と水の比喩がつかわれている。「椎輪→大輅」「水→氷」の変化が、さきの例とどうよう論拠ふうにつかわれ、つづく「乗物や水におなじく、文学も進歩し変化してゆく」という断案（引用略）が、平易かつ説得的に説明される構造となっている。この箇所は、文学の進歩史観をかたったものとして注目されているが（前稿参照）、そうした重要な断案が、やはり比喩によってささえられ、論理づけられているのである。

「文選序」ではないが、蕭統は「陶淵明序」においても、有名な比喩をつかっている。それは、

白璧微瑕、惟在閒情一賦。楊雄所謂勧百而諷一者、卒無諷諫。何足揺其筆端。惜哉、亡是可也。

白璧中のきずと称すべき作は、「閑情賦」の一賦である。これは揚雄のいう「誘惑が百で、諷諫は一だけ」というしろもので、諷諫の意などまったくない。どうしてわざわざ筆をとるほどのものだろうか。おしいことだ、こんな作などなければよかったのに。

という部分である。ここの比喩は、「白璧中のきず→傑作群のなかの愚作」というふうに、たとえふうの使いかたをされている。それでも内容的には、「傑作群のなかの愚作→ないほうがよかった」とつづいており、論理的にも重要なはたらきをしているのに注意しよう。比喩は蕭統にとって、重要な断案をくだすときにつかう、とっておきの技法だったのかもしれない。

さて対偶と比喩につづいて、「文選序」中の語彙についてもみておこう。「文選序」の語彙の特徴として、新古のことばの共存と融合をあげてよかろう。すなわち、蕭統は経書など伝統的な典故もつかっているが、同時に、蕭統以前に用例をみいだしにくい新語や新意（用例はある

が、あらたな意味を充入して使用したもの）も、また使用しているのである。

まず前者から指摘すると、たとえば第一段の「伏羲氏之」五句は「尚書序」から、また「易曰観乎天文」六句は『易経』繫辞下伝と同豫卦から、さらに「詩序云詩有六義焉」八句は「毛詩大序」から、それぞれ引用したものである。その他、挙例は略するが、「文選序」には、これ以外にも経書からの典故が散見している（前稿参照）。これらは、蕭統が「文選序」をつづるにあたって、過去の［とくに儒教ふう］文学論をよく研究し、まなんでいたことをしめしていよう。

ところが、そのいっぽう「文選序」には、新語や新意の使用もまたおおい。たとえば冒頭部分の、

［式観元始、［冬穴夏巣之時、世質民淳、斯文未作。
眇覿玄風、［茹毛飲血之世、

太古のころをみわたし、原始の風俗をふりかえってみると、冬は穴居し夏は巣にすみ、鳥獣の［肉だけでなく］毛までくらい血をするなど、世相は質素で民草は淳朴であり、文学はまだ発生していなかった。

の語彙をみてみよう。まず「冬穴」「夏巣」の二語は、『礼記』礼運にもとづく典故である。その意味では、伝統的なことばといえよう。しかしその翦裁のしかたたるや、きわめて新奇なものであり、ほとんど新語というべきものになっていた。その意味で、この二語こそ、伝統と新奇さとが融合した典型例だといってよい。さらに「式観」「元始」「眇覿」は、これ以前に用例がみあたらぬ新語であり、また「玄風」「斯文」の二語は、新意を充入されたことばであった（以上、前稿を参照）。

これを要するに、「文選序」の語彙は、古典による典雅さと創造による新奇さとが、適切にミックスされているといってよい。基本的には、経書からの典故や語彙を尊重するのだが、それでも経書べったりではなく、進取の気性にもとんでいるのだ。このことは、「文選序」で、詩の六義や風雅の道を引用しながらも、それでも劉勰のように五経の文へ回帰せよなどとは主張しない、蕭統の穏健な文学観を反映したものかもしれない。蕭統は女楽や艶詩をきらうなど、当時としては保守的な志向をもっていたようだが、こと序文の語彙選択に関しては、伝統と進取とを共存させた、よい意味での中庸さを有していたといえよう。

つぎの部分は、そうした中庸さ志向が、もっとも典型的にあらわれた文章だとおもわれる。それは序文中でとくに有名な、

若其［讚論之綜緝辞采、［事出於沈思、
［序述之錯比文華、［義帰乎翰藻。
故与夫篇什、雑而集之。

ところが史書のなかの讃論は華麗な文辞をあつめ、序述は装飾をまじえており、それらの文章たるや、内容はふかい思弁から出発し、その意味は華麗な文辞による表現に帰着している。さすれば、文学作品とならべて、これらの文章も採録してよかろう。

という部分である。整然とした対偶構造のなかで、名だかい沈思翰藻の理論がかたられている。ここでの「辞采」「文華」「沈思」「翰藻」などは、いずれも経書には用例がないが、後漢以後とくに六朝以後の文献には、ときに出現することばである（ただし、「綜緝」「錯比」は用例なし）。かく新古のさかいにあるという点で、これらの語彙も中庸ふうなことばだといえるが、それにもまして、「事出於沈思、義帰乎翰藻」の内容こそ、蕭統の中庸さ志向を、明瞭にしめしたものだろう。ふかい思弁（沈思）と華麗な文辞（翰藻）とは、ほんらい両立しがたい傾向である。だが蕭統は、この相反する二者を融合させたものこそ、価値ある文学であり、『文選』に採録すべき作だと主張するのだ。つまりこの二句は、相反する二者の彬彬たる兼備や融合を重視するものであり、蕭統の中庸さ志向を、内容の面からかたったものといえよう。

以上、「文選序」の文章を形式的な方面から考察してきた。ここまでの記述をまとめてみると、「文選序」の特徴として、

(1)対偶率がたかい。
(2)駢体と散体とを適宜に兼行させている。
(3)同字の重出をさけている。
(4)比喩を効果的に利用している。
(5)新古の語彙を共存し融合させている。
(6)典故の新奇な翦裁をおこなっている。

などがあげられよう。これらは、当時の美文としてみれば、水準以下だとしてマイナス点をつけるべきものは、ひとつとしてない。それゆえ、総合的にかんがえると、「文選序」の文章は、当時でも上乗のものだったと評してよい。[3] なかでも、美文の命というべき対偶の創作において、量的にも質的にも同時期の序文にまさる手腕を発揮しており、蕭統の創作手腕はなみなみならぬものだったと判断してよかろう（対偶の多寡だけでみれば、「玉台新詠序」が「文選序」にまさっている。だが「玉序」は、対偶がおおすぎて文脈が停滞し、晦渋な行文におちいるという欠点もあわせもっている。六朝文章の価値や完成度を、対偶の多寡を基準にして判断するか、行文の暢達さも考慮するかによって、両篇への評価はわかれよう）。

四　折衷志向

「文選序」中の文学論の内実やその意義については、先学によって多様な議論がつみあげられている。それらのうち、主要な論点を私なりに整理すれば、進歩史観、文学の娯楽性重視、文学と非文学の弁別、「能文」重視の選録基準などがあげられよう。文選学の専家でもない私

は、これらの論議にわってはいるような識見は、もちあわしていないし、また「文選序」の文章に注目する本稿の趣旨にもあわない。それでも叙述の都合上、序文中の文学論に対し、ひとつだけ指摘しておきたいことがある。それは、序文中での種々の議論は、いずれも先行して主張した者がおり、蕭統の首唱になるものではない。蕭統の議論はむしろ、当時の有力な文学的主張をとりこみ、折衷したものではなかったか――ということである。

たとえば、「文選序」の特徴的な主張として、しばしば言あげされる進歩史観についてかんがえてみよう。これは、「文選序」では、乗物や水の比喩をつかって、「文学は時代がくだるにつれて華麗になった」と主張されていた。ところが、蕭統にさきだつ江淹は、「雑体詩序」で五言詩を例にしつつ、つぎのようにいっている。

夫楚謡漢風、既非一骨。魏製晋造、固亦二体。譬猶藍朱成彩、雑錯之変無窮、宮角為音、靡曼之態不極。故娥眉詎同貌、而俱動於魄。芳草寧共気、而皆悦於魂、不其然歟。……然五言之興、諒非夏古。但関西鄴下、既以罕同。河外江南、頗為異法。故玄黄経緯之弁、金碧沈浮之殊、僕以為亦各具美兼善而已。

楚の詩歌と漢代の作風はおなじでないし、魏の文学と晋の詩文も、またことなるものだ。それは、たとえれば、藍や朱などの色彩が多様な交錯の美をしめし、宮や角の音階が無限のハーモニーを奏するようなものだ。だから女性の美しさがちがっても、ひとしく心をときめかすし、草花の香りがちがっても、おなじように気分がよくなるのも、これとおなじ原理ではなかろうか。……

ところで五言詩の発生は、それほどふるくはないが、前漢と魏代では詩風がことなっているし、西晋と東晋以後でも、そうとう傾向がちがっている。これら各代の詩は作風や傾向の相違があり、また辞藻や音律の違いもあるが、私は、それぞれに美をそなえ、善を有しているとかんがえる。

ここで江淹は、各代のどの詩も「それぞれに美をそなえ、善を有している」と主張している。これは明確な進歩史観ではないが、それでも聖人のましませし古代こそがすばらしいという、尚古の考えかたとはことなったものである。さらに沈約は「宋書謝霊運伝論」において、「屈原以降、文学はしだいに精密さをましてきたが、声律の秘訣には、私がはじめて気づいた」とのべ、声律を尊重した最近（とくに自分）の文学こそ、価値があるとかたっている（後述）。この両者の主張は、ともに伝統的な尚古の考えかたにそむき、「文選序」中の進歩史観に接近したものであり、しかも蕭統にさきだっての主張なのである。すると、こうした進歩史観は、当時はめずらしくなかったのではないだろうか。

おなじく、娯楽性重視の主張についても、かんがえて

みよう。これは、「文選序」では、楽器や模様の比喩によりつつ、「文学はジャンルがちがっても、ともにひとをよろこばせるのだ」と主張されていた。しかし、はやく魏の曹丕らは、宴席の場で遊戯的に詩文を競作してあそんでいたし（同題競采）、また晋代における金谷や蘭亭のあそびなど、六朝貴族たちの集団的競作にいたっては、さらに娯楽性のつよい文学の催しだったといってよい。こうした事実をふまえれば、蕭統の娯楽性重視の主張のほうが当時は常識であり、「文学は政治的教化に役だつべきだ」という考えかたのほうこそ、むしろ教条的できどったものだったのではないだろうか（拙著『六朝の遊戯文学』第十四章を参照）。

もうひとつ例をあげれば、文学非文学の区別の主張もそうである。これは、「文選序」では、「経書や諸子、弁論、史書の類は〈立意〉を目的とするから非文学であり、沈思翰藻を兼備した〈能文〉の作こそ、文学と称すべきものである」とかたっていた。しかし、かく「能文」を重視する考えかたは、すでに興膳宏氏が指摘されるように、蕭統以前にすでに定着していたようだ。氏によると、『文選』に先行する『文章流別集』や『文苑』『翰林論』などは、輯佚資料から推測するかぎり、蕭統とおなじ立場から作品をえらんでいたという。すると、経書や諸子の類を非文学とし、「能文」の詩文を重視する「文選序」の方針も、とくに斬新なものではなく、「過去に蓄積されてきた総集編纂の規定方針を大筋として追認し」たものにすぎなかったといってよさそうだ（『中国の文学理論』四〇頁　筑摩書房　一九八八）。

では、なぜ「文選序」中の議論は、かく当時の有力な文学的主張をとりこみ、折衷したものだったのだろうか。それは、まず蕭統の「寛和容衆」（『梁書』昭明太子伝）という性格に関係しよう。ここでの「寛和」は寛大にしてなごやか、「容衆」は多様な考えかたをうけいれる、の意だろう。そうした「寛和にして衆を容る」性格であれば、他人の文学的主張でも、とりいれやすかったろうと想像される（後述）。

これにくわえて、蕭統の皇太子という立場も、彼の「衆を容」れる傾向を助長したのではないか。このことを指摘されたのが、曹道衡氏の「関于蕭統和文選的幾個問題」（『漢魏六朝文学論文集』所収　広西師範大学出版社　一九九九）である。曹道衡氏は、この御論のなかで、

『文選』は前人らの文学的成果を総合したもので、『文心雕龍』や『詩品』とは、まったく性格がちがっている。『文心雕龍』と『詩品』は個人的著作であり、比較的自由に自分の観点を叙することができる。ところが『文選』のばあいは、多少とも官書の性質をおびている。『文選』は蕭統ひとりが署名するだけだが、じっさいはおおくの人びとによって完成されたからだ。そのうえ［編纂事業を］平穏にすすませようとすれば、各時代の文学の特色を体現せねばな

らないし、また多数の人びとに受容されるには、当時の統治集団の要求にも、きちんと対応せねばならなかった。蕭統は皇太子なので、彼が『文選』編纂を主宰するからには、自分の文学観を体現するだけではだめなのは、明白である。彼は統治者の代表として、あるべき文学の動向やモデルを、当時の文人たちにしめさねばならなかったのだ。

とのべられている。氏は、まず『文選』は蕭統ひとりの編でなく、編纂協力者がいたという前提にたつ。そして、蕭統の皇太子という立場にとくに着目し、『文選』編纂のさい、彼は「当時の統治集団の要求にも、きちんと対応せねばならなかった」ろう、と推測されるのである。私は、この曹氏の見かたは、『文選』編纂時の歴史的環境を説明したものとして、きわめて妥当だとおもう。たしかに皇太子という立場にあった以上、『文選』が［その編纂動機がどこにあったにせよ、結果的に］官書ふう性質をおび、「あるべき文学の動向やモデルを、当時の文人たちにしめさねばならなかった」のはとうぜんだろう。

この曹道衡氏の推測を後押しするものとして、私は、皇太子という立場の類似から、蕭統が平素から魏の［皇太子時代の］曹丕を、意識していたことを指摘しておきたい。蕭統がみずからを魏の曹丕に擬し、敬意をはらっていたことは、ずっと以前に拙稿「曹丕の与呉質書について―六朝文学との関連―」（「中国中世文学研究」第二〇号）でものべておいたが、[4] 最近かいた前稿でも、「文選序」中の「事出於沈思、義帰乎翰藻」二句に関連して、曹丕のすがたが髣髴していることに言及しておいた。すなわち、この二句をつづったとき、蕭統は魏の卞蘭「賛述太子賦并上賦表」（曹丕の俊英ぶりをほめたたえた作）の

沈思泉涌、華藻雲浮。

［曹丕の「典論」や賦頌では］ふかい思弁は泉のようにわき、華麗な文辞が雲のようにあつまっています。

の用例を介しつつ、とおく曹丕のすがたを想起していたのではないか、という推測である。[5]

このほか、「宴闌思旧詩」「与晋安王綱令」など、蕭統が自分を曹丕に擬していた事例には事欠かない。このように蕭統の脳裏には、曹丕のすがたを介して、つねに文学の指導者としての皇太子像があったと推測される。すると蕭統は、年わかい曹丕が応瑒や劉楨らをひきいて建安文学をリードしたように、自分も劉孝綽や陸倕、張率、到洽らを、ひきいねばならぬとおもったことだろう。

こうした意識をもった蕭統が、『文選』を編集しようとしたとき、おのずから「あるべき文学の動向やモデルを、当時の文人たちにしめさねばならな」いと自覚したことは想像にかたくない。くわえて、「［編纂事業を］平穏に

すすませようとすれば、各時代の文学の特色を体現せねばならないし、また多数の人びとに受容されるには、当時の統治集団の要求にも、きちんと対応せねばならなかった」という事情もあった。そうだとすれば蕭統は、編集協力者たちの多様な文学観を満足させながらも、また当時の多数の人びとにうけいれられるよう、いわば内外にわたって、八方美人ふうな編集方針をとらざるをえなかったにちがいない。そうした状況が、「文選序」中の議論を、当時の多様な文学的主張をはばひろくとりいれた、折衷的なものにしたのではないだろうか（第三節でふれた、「文選序」の語彙における中庸さも、これにパラレルした志向だろう）。

こうした折衷志向は、『文選』の編纂や作品選録にも影響をおよぼしている。すなわち、『文選』の編纂にあたっては、過去のさまざまな論著から影響をうけていることが、おおくの研究者によって指摘されている。王立群氏の著作によれば、『文選』に影響をあたえた論著として、劉勰『文心雕龍』、鍾嶸『詩品』、江淹「雑体詩三十首」、任昉『文章縁起』、摯虞『文章流別集』、李充「翰林論」、劉義慶『集林』、沈約「宋書謝霊運伝論」などがあげられ、蕭統がもっとも意識していたのはどの論著だったのか、いまだ諸説紛々という状況のようだ（『現代文選学史』『文選成書研究』ともに第七章を参照）。『文選』の編纂や作品選録に、こうした過去の論著からの影響が云々されるのは、やはり蕭統が皇太子という地位にある以上、「自分の文学観を体現するだけではだめ」であり、すすんで過去の論著にまなぼうとしたことも、ひとつの原因だろう。

ついでながら、蕭統の文学観を論じるさい、しばしば「文選序」と「陶淵明序」における齟齬が、問題にされてきた。それは、「文選序」で文学の娯楽性を主張しておりながら、「陶淵明序」では「閑情賦」批判をとおして（前出）、諷諫性を重視している。かたや娯楽性の主張、かたや諷諫の重視では、矛盾もいいところで、いったい蕭統の真の文学観はどっちなのか――という疑問である。だがこうした疑問も、この曹道衡氏のご指摘にしたがえば、うまく説明がつくようにおもう。すなわち、「陶淵明序」は蕭統ひとりの手になる執筆なので、「文学は諷諫を重視すべし」という自説を、自由に主張することができた。それに対し、『文選』は官書ふう性質をおびていたので、その序文では蕭統個人の諷諫重視の志向を抑制し、周囲の大勢にしたがいつつ、文学の娯楽性をおもんじたのだろう――と。[6] こうした蕭統の柔軟な態度は、かつて拙稿「六朝文人の多面的作風に関する一考察」（「立命館文学」五九八号　清水凱夫教授退職記念論集　二〇〇七）で提起した、六朝文人たちの「作風の使いわけ」の一例に該当するのではないかとおもう。あわせてご参照いただければさいわいである。

五　序文代作説

現在、『文選』が、蕭統ひとりの手で編纂されたとかん

がえる研究者は、おおくはなかろう。王立群氏によれば、現在、『文選』編者については、劉孝綽とするもの、蕭統とするもの、蕭統と劉孝綽の共同編纂とするもの――の三派が鼎立している状態だという（『現代文選学史』一八一～二一一頁）。

わが日本では、つとに斯波六郎氏が元兢「古今詩人秀句序」（『文鏡秘府論』南巻所引）のなかの、

晩代銓文者多矣。至如梁昭明太子蕭統与劉孝綽等撰集文選、自謂畢乎天地、懸諸日月、然於取捨、非無舛謬。

近代において詩文集をあんだ者がおおい。梁の昭明太子蕭統は劉孝綽らとともに『文選』を編纂し、みずから「この書は天地とおなじくつづき、日月とならぶものだ」とおもったという。だが、作品の取捨選択には、誤謬がないではない。

や、『中興書目』（『玉海』巻五四所引）の原注の、

与何遜劉孝綽等選集。

［蕭統は］何遜や劉孝綽らとともに、『文選』を編纂した。

の記事によりつつ、『文選』編纂にさいし、劉孝綽らの協力があったろうことを指摘された（「解題　昭明太子」一九四八　『六朝文学への思索』所収　創文社）。そして近時にいたって、清水凱夫氏がこの説を強力に主張し、劉孝綽主導説を展開されたのは、研究者のあいだでは周知のことだろう。こうした経緯をへて、中国ではいざしらず、日本の学界では、劉孝綽らの編纂協力はとうぜんのこととし、むしろ蕭統自身の関与がどの程度であったかの議論のほうに、関心がうつっているかのようにおもわれる（たとえば、興膳宏「文選の成立と流伝」へ『中国読書人の政治と文学』創文社　二〇〇二〉は、そうした立場にたっている）。

こうした劉孝綽らの関与が云々されるところ、「文選序」の文も、蕭統ではなく、劉孝綽の代作だったのではないか、という説が提起されるにいたった。清水凱夫氏も代作の可能性に言及されているが（『新文選学』二三六、三九八～九頁）、とりわけ劉孝綽代作説を強調されたのが、中国の屈守元氏である。屈氏は、『文選』編纂に関しては、蕭統主導説の立場にたたれたが、「文選序」の作者については、ひとり劉孝綽代作説を主張された。氏のこの主張は、日本の旧抄本にかきこまれた旁注が根拠になっている。すなわち、上野本『文選』残巻の「文選序」の上欄に、何者かの手によって、

太子令劉孝綽作之云云。

昭明太子は劉孝綽に命じてこれをつくらせた云云。

という書きこみがなされている。この書きこみ、字句をそのまま理解すれば、たしかに劉孝綽の序文代作をうらづけるものとせねばならない。それゆえ、屈氏はこの書きこみをとりあげて、

この旁注は、我われに重要な消息を提供してくれる。すなわち、蕭統の著名な文論の古典的著述たる「文選序」も、また劉孝綽の代筆だったということである。劉孝綽の『文選』編纂上での地位は、まことに重要なものだったのだ。

と主張されたのだった（『文選導読』二九頁　巴蜀書社一九九三）。

もっとも、この書きこみの存在は、はやくからしられていた。斯波六郎氏も、つとに気づかれていたが、「或は『昭明太子集』の序文を劉孝綽につくらせたという『梁書』劉孝綽伝の記事と混線したものではないかと疑われる」と疑問を呈し、それほど重視されなかった（同右）。くわえて最近では、傅剛氏も『文選版本研究』二百六十七頁（北京大学出版社　二〇〇〇）において、書誌の立場からこの書きこみの信憑性に疑念を呈されている（注⑻にあげた『蕭統評伝』百九十二頁も参照）。このように、この書きこみは孤証であるだけに、どこまで信用してよいのか、不安がないではない。そのため、この資料だけによって、「文選序」の劉孝綽代作説を断言する研究者は、

［管見のかぎりでは］屈氏以外にはまだいないようだ。

しかし、そうだとしても、こうした資料があるのは事実である。「文選序」を考察してきた本稿が、この劉孝綽代作説について、まったくふれぬというわけにはいかない。この問題について私は、結論的にいえば、「文選序」の作者は、やはり蕭統でよいとかんがえている。そこで以下では、先学のご発言も紹介しながら、蕭統自作説に肩いれする理由をのべてゆこう。

まず第一に、「文選序」をよむと、だれしも気づくような矛盾点がある。それは、序文中の発言と『文選』本体とのあいだで、奇妙な不整合が存在していることである。こまかな違いはさておき、おおきな不整合をあげれば、三つある。ひとつめは、「文選序」第二段の文学史的叙述の内容と、じっさいの『文選』採録作品とが齟齬することである。たとえば、「文選序」では荀況の賦にふれるが、『文選』本体は荀況の賦を採録していない。ふたつめは、ジャンルの齟齬である。「文選序」では戒や誥のジャンルに言及するが、『文選』ではそのジャンルを採録していないのだ。みっつめに、ジャンルの呼称がちがっている。すなわち、「文選序」では「答客」「指事」などと称しながら、『文選』では「設論」というジャンル名をもちいているのである（「指事」は設論ではなく、「七」ジャンルをさすという説もある。そうだとしても、不整合という点ではおなじい。前稿参照）。

こうした不整合は、『文選』と「文選序」とをきりはな

してかんがえれば、とくに問題は生じない。だが、「文選序」が『文選』の序文としてかかれ、しかも同一人物の手になるとしたならば、右のようなことは、たがいに齟齬することはありえず、一致してしかるべきだろう。とくにみっつめの、序で「答客」といいながら、『文選』で「設論」の名称をつかっているのは、どうにも説明のつかぬ齟齬だといわざるをえない。こうした両者間の不整合さゆえに、現代の研究者のあいだでは、『文選』は倉卒の間にあまれた杜撰な選集だったのではないか（王暁東「文選系倉促成書説」『文選学新論』所収　中州古籍出版社　一九九七）とか、『文選』編纂者と「文選序」作者とは、ことなったジャンル意識を有していたのではないか（傅剛『昭明文選研究』一七七頁　中国社会科学出版社　二〇〇〇）とか、いろんな疑念が提起されるにいたっている。

こうした疑念が発生するのはとうぜんであり、私もまったく同感である。右のような齟齬から判断すると、「文選序」の作者は、『文選』本体との整合性をあまり意識せず（あるいは、『文選』本体の構成をよくしらず）に序文をつづったと、かんがえざるをえないだろう。こうした奇妙な事態を、いかに理解すればよいのだろうか。といっても、私に妙案があるわけではない。ここではとりあえず、近時提出された傅剛氏のご意見（『昭明文選研究』一八三頁）に依拠しつつ、つぎのように推測しておこう。すなわち、『文選』をあむにあたって（傅剛氏は基本的に、『文選』は蕭統と劉孝綽の協力によってあまれた、とする立場にたたれる）、蕭統は「多様な文風を折衷するという」編纂の基本方針を決定し、ときには指示もくだしていたが、こまごました編纂実務や細部の調整などは、ほとんど劉孝綽らにまかせていた。やがて劉孝綽らによる編纂が完了してから、蕭統が選集全体の序文、つまり「文選序」をかいた（ふつう序文は、本体完成後にかく）[7]。だが蕭統は、『文選』本体の細部まで知悉しているわけではないから、つい右のような齟齬が生じてしまった――と。こうかんがえると、傅剛氏も指摘されるが、『文選』本体と序文とのあいだに齟齬が生じていることこそ、この序文が、劉孝綽の代作でなく、蕭統の自作であった証拠だといってよかろう[8]。劉孝綽が序文まで代作したのだったら、序文と本体とのあいだに齟齬が発生するはずがないからである。

蕭統自作説の論拠の第二として、「文選序」とほかの蕭統の文章とのあいだに、類似した行文がみえることがあげられる。いわば書きくせが共通しているわけで、これも蕭統自作説をうらづけるものだろう。例をあげれば、

「文選序」中に

事出於沈思、義帰乎翰藻。

という有名な対偶があった。ここで「事……、義……」という句法がつかわれているが、それとおなじ句法が、

蕭統の書簡文「答湘東王求文集及詩苑英華書」にも、

雖事涉烏有、義異擬倫。而清新卓爾、殊為佳作。

［おまえの詩文は］主題は虚構をまじえ、内容は見当ちがいの比喩をつかっているが、それでも清新さはとびぬけており、じつに佳作だといえよう。

と使用されている。対偶中での使用という点でも、おなじ措辞である。

さらに同書簡中の

吾少好斯文、迄茲無倦、譚経之暇、断務之余。陟龍樓而静拱、掩鶴関而高臥。与其飽食終日、寧遊思於文林。

私はわかいころから詩文がすきで、いまにいたるまであきることがなかった。講書のあいまや仕事の余暇には、龍楼で物思いにふけり、鶴関で隠棲したものだった。私は、終日飽食するよりは、文学の苑に心をあそばしたいとおもったものだ。

という部分や、また蕭統「答晋安王書」中の

責成有寄、居多暇日、殺核墳史、漁猟詞林。

私は太子の地位についたが、ひまな日々がおおかったので、古典をあじわい、詩文をあさったものです。

という行文も注目されよう。これらはともに、蕭統が文学への好みをかたった部分だが、ここでの措辞は、「文選序」第三段の、

余監撫余閑、居多暇日、歴観文囿、泛覧辞林、未嘗不心遊目想、移晷忘倦。

という部分と、内容も文章もよく似ているのだ。こうした類似した行文、つまり書きくせを共有することは、これらの作が同一人物の手になったことを暗示していよう。

六　温雅な人がら

そして蕭統自作説の論拠の第三として、「文選序」にうかがわれる率直な発言ぶりや、寛容な姿勢があげられよう。これらは前二者とはちがって、主観的な要素がつよいので、客観的証拠としてはよわいかもしれない。だがこれらは、皇太子としてそだった蕭統だけが有する特質ではないかとおもわれ、私としてはとくに強調したい事がらなのである。

では、まず前者の率直な発言ぶりからみてみよう。これにふさわしい例としては、さきにもあげた「文選序」中の、

私は監国撫軍のあいま、余暇がおおかったので、詩

文の苑にわけいり、ことばの林にいりびたった。そして、心は文学の世界にあそび、目は詩文の内容をおもいうかべ、日がかたむいても、あきることがなかった。（原文は前出）

という語句があげられよう。ここで蕭統は、自分の文学好きを率直にかたっている。なんでもない記述のようだが、かくすきなものはすきだとはっきりいえるのは、彼の正直で誠実な人がらを反映するものだろう。

こうした自分の好みを率直にかたることは、蕭統のもちまえだったようだ。彼は「陶淵明集序」においても、

余素愛其文、不能釈手。尚想其徳、恨不同時。

私は彼の詩文をこのみ、手ばなすことができぬ。淵明の徳望ぶりを想起しては、生時をおなじくしないのを、ざんねんにおもうのだ。

と淵明に対する愛情を、手ばなしで吐露している。

すきな文人の集をあみ、その集序をかき、そのなかで「彼の詩文をこのみ、手ばなすことができぬ」とつづるのは、とうぜんのことで、めずらしいことではない――とおもわれるかもしれない。だがそれは、けっしてふつうのことではない。かつて拙稿「序の文体について―六朝の別集序を中心に―」（「中京大学文学部紀要」第二五―二　一九九〇）でものべたが、当時の集序（別集の序文）は形式的な美辞で終始しており、いわば頌徳碑の文章と大差ないものであった。自分の率直な思いではなく、形式的な美辞麗句をつらねるのが、当時のふつうの集序の書きかただったのである。選集の序文のほうは、「文選序」以前のものは断片しかのこらないので、よくわからないが、別集より公的なものなので、おそらく同種の形式的な内容だったろう。そうだとすれば、「文選序」や「陶淵明集序」のごとき率直な発言ぶりは、当時としてかなり例外的なことだったとせねばならない。

こうした率直な感情の吐露は、側近が死んだときもおなじだった。たとえば「与殷芸令」では、蕭統は明山賓の逝去をかなしみ、

北兗信至、明常侍遂至殞逝。聞之傷怛。此賢儒術該通、志用稽古、温厚淳和、倫雅弘篤。授経以来、迄今二紀。……追憶談緒、皆為悲端。往矣如何。

北兗州から書簡が到着し、常侍の明山賓どのが逝去されたそうです。これをしって、かなしくてなりません。この賢者たるや儒学に精通し、古道を探求され、温厚にしてなごやか、雅正にして篤実なかたでした。大学で学問を教授して、二十四年にもなられます。……明山賓どのとの談論を追想しては、悲しみがわきおこります。彼は逝かれたのです、どうしようもありません。

といたんでいる。こうした率直な哀悼の吐露は、臣下の死をいたむというよりも、親友の死をいたむかのようだ。蕭統が薨去する直前の三四年は、この明山賓や到洽、陸倕、そしていま令をおくった殷芸など、おおくの側近が逝去している。そのたびに蕭統は、彼らの死をいたむ詩や書簡文をつづっており、いかに彼らを信頼していたかがよくわかる。こうした一面も、情あつき蕭統の性格をよくあらわしていよう。

親近していた人物が死んだら、かなしいとうったえるのはとうぜんかもしれない。だが蕭統は皇太子である。そうした高位にある者が、かく率直に「つらい、かなしい」とかいてしまえば、周辺に無用の穿鑿をおこしかねない。側近甲が死んだときは、そうでもなかったのに、側近乙の死のときだけ、こんなにかなしまれている。さては太子さまは・・・のような噂が、とびまわりかねないからだ。その意味で、蕭統の率直な感情表現は、プラスとマイナスの両面があったとおもわれ、個人的感情の吐露は慎重にすべきだったろう。だが、蕭統はそんなことに頓着せず、まことに率直に側近の死をいたんだ。おそらく蕭統の心中には、いい意味でもわるい意味でも、世俗的なおもわくがなかったのだろう。だからこそ、婉曲だったり、媚びたり、へんに無関心をよそおったりせず、率直に「文学がすきだ」「死なれてかなしい」とつづれたのだとおもわれる。

では、つぎに寛容な姿勢についてのべよう。これは、第四節でのべた、「文選序」にみえる柔軟性にとむ編集態度が、そのまま該当するといってよい。すなわち、蕭統は『文選』編纂にあたって、進歩史観や娯楽性重視など、先人の首唱になる主張をおおらかにうけいれ、また編集協力者たちの多様な文学観も満足させつつ、編集にあたったようだ。そのためには、自己の諷諫性重視の持論も抑制し、周囲の大勢にあえてしたがっていた（前述）。こうした自己をおさえた態度は、まさに寛容ということばがあてはまろう。

『梁書』昭明太子統伝は、蕭統の人がらについて、

毎所奏有謬誤及巧妄、皆即就弁析、示其可否、徐令改正、未嘗弾糾一人。平断法獄、多所全宥、天下皆称仁。性寛和容衆、喜慍不形於色。引納才学之士、賞愛無倦。

［蕭統は］奏上された事がらに過誤があると、いつもすぐみつけだした。そして是非を明示してから、おだやかに修正させ、ひとを糾弾したりしなかった。裁判では公平をたもち、無罪にすることがおおかったので、天下の人びとはその仁者ぶりを称賛した。蕭統の性格は寛容で包容力にとんでおり、自分の喜怒を表情にださなかった。そしてすぐれた人物を配下にあつめ、たたえてあきることがなかった。

という。この文章、過褒ぎみの傾向があり、多少わりび

いてかんがえねばならぬが、それにしても、蕭統が臣下の過失を糾弾しない、おだやかな人がらであったのは、たしかなようだ。さらに、蕭統が池に舟をうかべてあそんでいたとき、あるひとが「ここで女楽を演奏させるといい」といった。すると彼は「何ぞ必ずしも絲と竹ならん　山水に清音有り」という左思の詩をひいて、やわらかくたしなめた――という逸話ものこっている。こうした声をあらげぬおだやかな反論が、蕭統の常だったのだろう。第四節でも引用したが、蕭統の「寛和容衆」、すなわち寛容で包容力にとむ性格は、『文選』編纂の場においてこそ、有効に発揮されたことと推察される。

こうした寛容な姿勢は、六朝の文人たちのなかでは、なかなか有しがたいものであったのではないだろうか。たとえば鍾嶸「詩品序」は、当時の文学評価を批判して、

嶸観王公搢紳之士、毎博論之余、何嘗不以詩為口実。隨其嗜欲、商搉不同。淄澠並汎、朱紫相奪。諠譁競起、準的無依。

私が、王侯や貴紳のようすをみてみるに、彼らの議論の果ては、きまって詩の話題におちつく。ところがその議論たるや、各自のお好みしだいで、意見はバラバラである。巧も拙もごちゃまぜで、玉と石の区別もままならぬ。かしましい議論が紛糾しあっているが、きちんとした評価基準などありはしないのだ。

とかたっている。この鍾嶸の文には、頭から都人士を軽蔑したような口調がめだつ。するどい批判精神はうかがえるが、険のある行文というべきだろう。こうした文面には、蕭統の「おだやかに修正させ、ひとを糾弾したりしなかった」のごとき温雅さは、とぼしいといわざるをえない。

また沈約「宋書謝霊運伝論」をとりあげれば、ここで沈約は、おのが声律説のただしさを主張して、

自霊均以来、多歴年代、雖文体稍精、而此秘未覩。至於高言妙句、音韻天成。皆暗与理合、匪由思至。張蔡曹王、曾無先覚、潘陸顔謝、去之弥遠。世之知音者、有以得之、此言非謬。如曰不然、請待来哲。

屈原以来、ながい年月がすぎ、スタイルも精密になったが、この声律の秘訣には、だれも気づかなかった。卓越した詩句では、声律はしぜんに調和するが、これは暗合にすぎず、思慮の結果ではない。張衡・蔡邕・曹植・王粲らは声律に気づかなかったし、潘岳・陸機・顔延之・謝霊運らも、まったく無知だった。後代の知者（私）が、これをさとったのだ。この私の見かたは、まちがいではない。もし誤りだというのなら、後代の俊英の判定をまとう。

といっている。ここにみえる「この声律の秘訣には、だ

れも気づかなかった」や、「この私の見かたは、まちがいではない。もし誤りだというのなら、後代の俊英の判定をまとう」のことばは、つよい自己主張を感じさせる。沈約が声律説に自信をもっていたことがよくわかるが、それにしてもこうした発言は、すこしあざとすぎはしないだろうか。蕭統の「私は彼の詩文をこのみ、手ばなすことができぬ。淵明の徳望ぶりを想起しては、生時をおなじくしないのを、ざんねんにおもうのだ」のごとき、率直にして謙虚な発言とくらべると、かなりちがった資質を感じさせよう。

もちろん蕭統も、他人批判をしないわけではない。たとえば、「陶淵明序」では、有名な「閑情賦」批判もおこなっている。それは、

白璧中のきずと称すべき作は、「閑情賦」の一賦である。これは揚雄のいう「誘惑が百で、諷諫は一だけ」というしろもので、諷諫の意などまったくない。どうしてわざわざ筆をとるほどのものだろうか。おしいことだ、こんな作などなければよかったのに。（原文は前出）

というものだった。ここで蕭統は、「こんな作などなければよかったのに」と、つよい批判をつづっている。しかしその底には、淵明へのあたたかい親愛の情がこもっており、侮蔑や尊大さなどとは無縁だといってよい。その意味でこの発言は、私淑すればこその痛言だったというべきだろう。

これを要するに、蕭統は、他人に牙をむかない、温雅な人がらだったといってよい。周囲の者にあてた書簡文や「陶淵明序」には、その人がらにふさわしい、おだやかで誠実な文言がつづられていた。そうした、攻撃性や悪意などと縁のない文面は、幼少期から皇太子として悠々とすごしてきた雲上の貴人にして、はじめてかけるものではないだろうか。[9] こうかんがれば、「文選序」を特徴的づける率直な発言や寛容な姿勢も、そうした温雅な人がらを反映したものであり、蕭統の自作として矛盾しないどころか、まことにふさわしいものといえよう。

もっとも、当時は模擬詩が流行した時代であった。江淹などは模擬を得意とし、彼が阮籍や陶淵明に模した詩は、後代に真作とまちがわれたという。すると、この「文選序」も、右のごとき蕭統の書きくせや特徴を、劉孝綽がたくみに模してつづった代作だと、主張できなくもないかもしれない。

しかし、そうはいっても、他人の書きくせは真似できても、「文選序」にあるような率直な発言や寛容な姿勢は、なかなか模擬しがたいのではあるまいか。それは、高貴なひとだけがもつおおようさであり、また温雅な人がらがかもしだす、いわくいいがたい雰囲気のようなものであるからだ。もしそれをも模擬できたとすれば、劉孝綽は江淹をこえる、稀代の模擬名人だったとせねばなるま

い。

以上、「文選序」が蕭統の自作だとかんがえる理由として、第一に序文と『文選』本体の不整合がうまく説明できる、第二に蕭統の他の文章とのあいだに、共通した書きぐせがみえる、第三に序文中の率直な発言や寛容な姿勢が、温雅な人がらと合致する――の三点をあげてきた。こうした理由に、いくばくかの妥当性があるとすれば、上野本『文選』残巻の「太子令劉孝綽作之云云」の書きこみだけを根拠にして、劉孝綽代作説を主張することはむつかしいというべきだろう。それゆえ私は、将来に確実な新資料が出現してこないかぎり、このまま蕭統の自作とかんがえて大過ないだろうとかんがえる。

注

(1) 後代の批評家は、駢散を兼行させるやりかたを、駢散兼行とか駢散合一とか称して、ひとつの技法とみなしている。『中国文章論　六朝麗指』(汲古書院　一九九〇)第三十四節を参照。

(2) 「文選序」にも、「観乎天文、以察時変；観乎人文、以化成天下」という、字数のあわぬ対偶ふう行文がある。だが、ここは『易経』からの引用であり、蕭統がつづった文ではない。おそらく蕭統は経書に敬意を表して、あえて字句に裁をほどこさなかったのだろう。

(3) ただし蕭統は声律の諧調には、あまり意識をはらっていなかったようだ(たとえば、陳慶元「蕭統与声律説――文選登録斉梁詩剖析――「中州学刊」一九九六―三)を参照)。また四六句も、「文選序」では多少おおいという程度にとどまる。蕭統より時代がくだった徐陵や庾信の美文になると、これら声律や四六の技巧も徹底されてくるのだが、蕭統のころにあってはやむをえないというべきだろう。

(4) 拙稿「曹丕の与呉質書について――六朝文学との関連――」発表後、佐伯雅宣「梁代の侍宴詩について」(「日本中国学会報」第五四集　二〇〇二)があらわれて、蕭統と曹丕の相関に関する資料をおぎなってくれている。あわせて参照されたい。

(5) 卞蘭の「賛述太子賦并上賦表」という作は、劉孝綽の「昭明太子集序」のなかでも、

仮使王朗報箋、卞蘭献頌、猶不足以揄揚著述、称賛才章。況在庸臣、曾何彷彿。

かりに王朗に「与許文休書」をかかせ、卞蘭に「賛述太子賦并上賦表」を献じさせたとしても、太子さま(蕭統)の著述をほめたたえ、文学を称賛しきれないでしょう。まして愚臣ごときが、どうして真価を髣髴させることができましょうか。

と言及されており、蕭統周辺でしばしば話題になっていたようだ(卞蘭の賦と対になる王朗「与許文休書」でも、曹丕をめぐみぶかい人物として称賛している)。

(6) 「文選序」と「陶淵明集序」における文学観の齟齬については、胡燿震「陶淵明集序的写作時間和蕭統評陶的独異衆説、自己矛盾」(『中国中古文学研究』所収。学苑出版社

二〇〇五）や曹旭『詩品研究』（上海古籍出版社　一九九八）百九十八～九頁も、公的立場と私的立場との使いわけにその原因をもとめている。これからは「蕭統は公私の別によって発言をつかいわけた」という説明が、定説になるかもしれない。

（7）兪紹初「文選成書過程擬測」（『文選学新論』所収）は、「文選序」は『文選』完成まえにかかれたのではないか、と推測している。だが、清水氏も『新文選学』二百三十五頁で指摘されるように、この主張はなりたちにくいだろう。序文はふつう本体完成後にかくものであり、特段の資料がないかぎりは、本体完成後とかんがえるべきだろう。

（8）曹道衡・傅剛両氏の共著『蕭統評伝』（南京大学出版社二〇〇一）の百九十二頁にも、ほぼ同趣旨の記述がある。

（9）おなじ好文の皇太子ではあっても、蕭統の死後に太子になった蕭綱のばあいは、その言動がいささか兄とはちがっていたようだ。たとえば「答張纘謝示集書」において、蕭綱は、

不為壮夫、楊雄実小言破道。非謂君子、曹植亦小弁破言。

論之科刑、罪在不赦。

「りっぱな男は文学などつくらない」とは、揚雄のじつにつまらぬ発言である。また「辞賦を創作したとて君子とはいえない」とは、曹植のまたくだらぬ意見である。この二人の刑罰を論ずれば、その罪はゆるすわけにはゆかない。

とつづっている。これはもちろん、張纘にむけた冗談ではあろう。だが冗談にしても、たかだか文学上のことで、「二人の刑罰を論ずれば、その罪はゆるすわけにはゆかない」などとかくのは、おだやかではない。みずからの高位を笠にきた、尊大な発言だというべきだろう。つまり太子であれば、みな蕭統のような温雅さを有するというわけではないのである。すると、うまれてすぐ太子となり、太子としてそだてられた蕭統は、やはり特別の存在だったといってよいかもしれない。